

〈研究ノート〉

日本と韓国の言語景観に関する研究の行方

Whereabouts of the research on language landscape of Japan and Korea

梁 敏鎬 (全州大学 人文科学総合研究所)

キーワード：多言語、言語景観モデル、社会言語学、対照研究

1. はじめに

近頃、日本と韓国では多くの場面で多言語表記は増えている。おそらく国際化に伴う自然な現象であるが、いつまでこのような多言語表記は続くのか。このような疑問から本研究は始まった。

日本の言語景観に関する研究は2000年以降、飛躍的に発展してきた。一方、韓国での言語景観研究はほとんどないが、公共場所での多言語表記に関する研究がある(梁敏鎬 2010)。ただし、多言語表記に関する実態は把握できたものの、深く掘り下げて研究ではない。

そこで本研究では本人が実際に撮り集める多言語景観の資料をもとに、両国における言語景観のモデルを予測し、今後の言語景観研究の方向性について言及したい。

2. 日本と韓国の言語景観

最近の日本の公共表示は井上(2000)と田中(2007)が述べたように「日本語・英語・中国語・韓国語」のJECK表記(標準モデル)化しつつある。これが公共表記の一般的モデルであるが、必ずしもこのモデルに当てはまらない。例えば、写真1のように韓国人観光客が多い地域、福岡は変形した標準モデルが存在する。



〈写真1〉 福岡空港の案内

福岡空港は中国語と韓国語の順序が変わった「日本語・英語・韓国語・中国語」の JEKC 表記も頻繁に目につく。これは地理的近接効果と需要者中心の表記パターンである。

以上のように本研究では日本と韓国であまり触れることができなかった言語景観のモデルについて分かりやすく説明したい。

3. 言語景観研究の行方

今後の言語景観に関する研究は、日韓で見られる様々な多言語化に注目し、実際に資料（写真・動画・音声資料など）を集めて、両国の多言語景観の異同を綿密に検討する必要がある。調査は実態調査に加えて意識調査、面接調査も行う必要がある。これらの調査を通して予測される内容を以下のようにまとめることができる。

- 今後、単一言語表記から多言語表記に変化
- 誤用が多い表現が存在するが、今後正しく自然な表現に修正
- 多言語表記のうち、英語(H)が他の言語(L)に比べて正確で表記の数も多い
- 多言語化モデルが予測可能

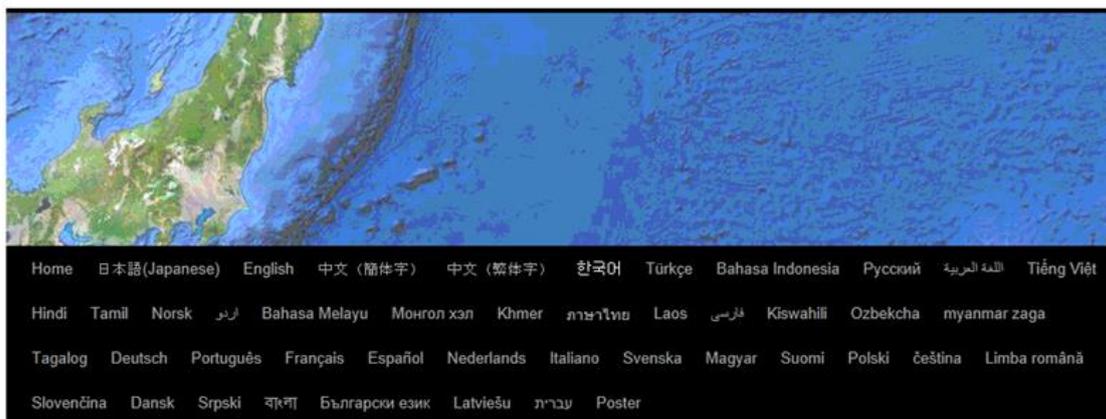
詳しく説明すると、多くの言語表記が初期段階の単一言語表記(母語)から徐々に多言語表記(英語・中国語・韓国語(日本語))に変わっていくだろう。例えば、韓国では日本語の促音表記が誤植(字体の大きさ)として多く登場するのも事実である。一方、日本では韓国語の助詞「の」が不自然な場合が多いが、言語表記が徐々に不自然な表記から自然かつ正しい表現に改められているだろう。また英語(H)表記が他の言語(L)に比べて正確な表現が多い。日本と韓国では英語がなじみ深い言語であるため、誤植は見つけやすいと思う。

従来の調査や研究により、両国の多言語化は年々進んでいることが明らかになった。ただし、こうした先行研究の結果をもとに今後の多言語化のパターンを場面ごとに予測することも可能である。

第1モデルは、写真2のように時間が経過するにつれて言語の数が増えるパターンで、緊急時に適応可能である。3.11大震災後、災害放送やニュースが約28カ国語で流されたことがあった。このように言語が一気に増えるタイプである。

Japan earthquake how to protect yourself

*guide to take care and protect yourself
during the earthquake- basic advice*



<写真 2> 地震発生時のマニュアル

第2モデルは、写真3のように一般的な多言語景観モデルとして普遍的に定着する可能性が高い。今回の調査でも自国語・英語・中国語・日本語（韓国語）の組み合わせが多く見られた。



<写真 3> 四ツ谷駅の案内(JECK 表記)

第3モデルは、観光地で客の需要に合わせて言語が増えるパターンである。たとえば、写真4は東名高速道路のSA案内である。箱根を訪問する韓国人観光客に合わせて、ハングル表記を加えた例である。また、ソウルの明洞（ミョンドン）の場合、最初、日本語のみで表記が出されたところが多かったが、中国人観光客が増加するにつれ、中国語が増えつつある。今後、東南アジアの観光客が増加するにつれ、言語の数も増えるはずである。



<写真 4> 東名高速道路の SA 案内

第 4 モデルは、最近登場するパターンで、写真 5 のように新しい施設物やしゃれた建物や新築の建物の場合、英語、またはサイン（絵）で表記するケースが増えている。



<写真 5> 韓国 全州大学のゴミ箱

以上のように多言語表記を条件や場面によってモデル化することもできる。今後の言語景観研究はこのように分かりやすい内容で接近する必要がある。

4. おわりに

最近日韓ともに外国人が日々増加している時代的な流れから多言語化の問題はただ町の環境整備の問題ではなく、実生活に密接な関係があるため、両国の言語景観の実態を把握するのが優先となっている。最近両国の言語景観の実態は農村と都市関係なく困難な状況においてある。したがって、これからの多言語表記及び言語景観研究をとおして政府や自治体が街づくりの造成事業を行う際に多言語化の基本資料として利用可能であろう。

参考文献

- 井上史雄 (2000) 『日本語の値段』 大修館書店
- (2001) 『日本語は生き残れるか』 PHP 研究所
- (2007) 「多言語表示の経済原理」『社会言語科学会 第 20 回大会発表論文集』 社会言語科学会
- (2011) 『経済言語学論考』 明治書院
- 陣内正敬 (2007) 『外来語の社会言語学』 世界思想社
- 庄司博史・p.バックハウス・F.クルマス (2009) 『日本の言語景観』 三元社
- 田中ゆかり (2007) 「「わかりやすい情報伝達」とは何かー多言語化と福祉の観点からー」『第 1 回博報「ことばと文化・教育」研究助成成果論文集』 財団法人 博報児童教育振興会
- バックハウス, P (2005) 「日本の多言語景観」 真田信治・庄司博史編『辞典 日本の多言語社会』 岩波書店
- (2007) 「公共文字と日本の多言語化ー東京の言語景観を事例に」 国立国語研究所 (編) 『文字と社会』 (新「ことば」シリーズ 20) 東京: ぎょうせい
- 洪珉杓 (2007) 『日韓の言語文化の理解』 風間書房
- 宮島達夫 (1995) 「多言語社会への対応ー大阪: 1994 年ー」『阪大日本語研究』 7
- 梁敏鎬 (2008) 「外来語の受容と定着に関する研究ー日本と韓国の対照研究を中心にー」『第 2 回博報「ことばと文化・教育」研究成果報告書』 博報児童振興会
- (2010) 「日本と韓国の言語景観に関する事例研究ー公共施設のトイレとゴミ箱の表記についてー」『日本語文学』 44 集
- (2011) 「多言語景観の意識に関する日韓対照研究」『日本語文学』 50
- 米川明彦 (1996) 「外国文化の移入と外国語」『国文学』 40-11
- Backhaus, Peter (2007) *Linguistic Landscape: A comparative Approach at Urban Multilingualism in Tokyo.* Clevedon : Multilingual Matters
- Chambers, J.K (1995) “Sociolinguistic Theory: Linguistic Variation and Its Social Significance” Blackwell
- Landry, R. & Bourhis, R. Y 1997 Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology*, 16